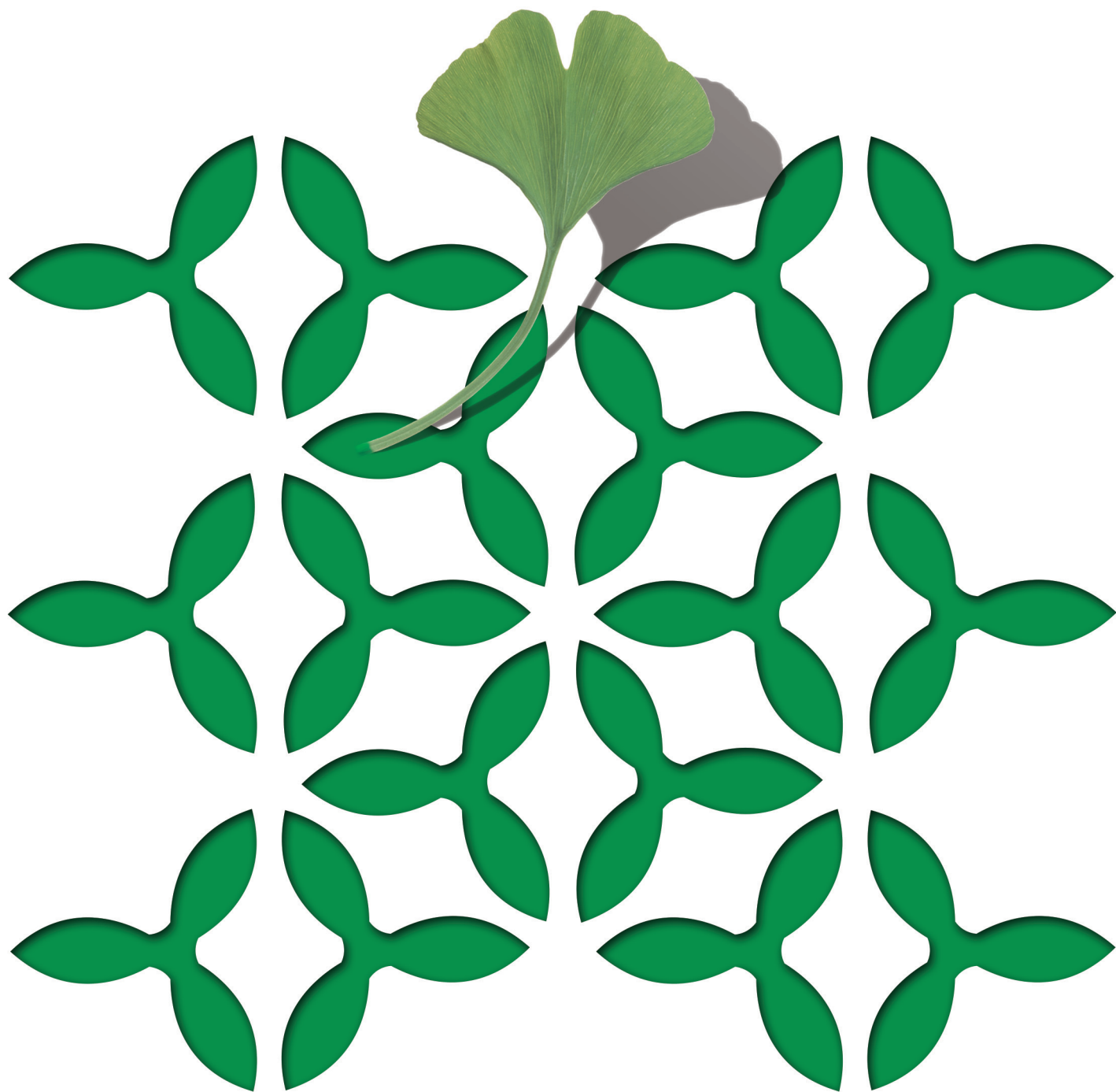




エイジレスに生きるため、生涯学習は「ライフワイド」

生涯学習開発財団理事長 松田妙子

「生涯学習」の英訳は、「ライフワイド ラーニングLifelong learning」です。当財団

も設立した際にこう訴えました。「超高齢社会に向けて定年後の長い人生をどう生きるか。ずっと社会とつながってエイジレスに生きていくためには、若い時から準備をし、学びましょう」と。そして、そのような生き方をする人を紹介し、社会に役立つための資格や学びの機会を提供し、私自身も71歳で博士号にチャレンジし取得するなど、常に日本の生涯学習を牽引してきたつもりです。

そうして設立から35年、「超高齢」に加えて「多元的共生社会」となったいま、エイジレスに生きていくためには、「ライフワイド」だけではなく「ライフワイド」という新たな価値観を持って学ぶ時代入っています。財団では2013年から、多元的共生社会にどう生きるかを考えるシンポジウムと

ワークショップを開催してきました。激しく変化する現代においては、一つの企業や国に依存して生きていくのは不可能で、多元的・多様なコミュニティと関わって生きていかざるをえないからです。

一方で、35年たっても変わらない、変えてはいけない原理もあります。人間が、心豊かに、生きがいを感じながら生きるためには、他者のために生きる、社会に役立つ使命が必要だということです。それは大伯父の大森兵蔵とアニー・シェプリー（安仁子）が、1911年に私財を投じて福祉施設「有隣園」を設立した時からずっと、今に至るまで引き継がれている当財団の精神なのです。

社会の変化に合わせた自分の役割を探し続けること。そのために学ぶのが生涯学習です。若い方々が、ただ長生きするだけでなく、心豊かに充実した人生を送るために、10月で90歳になった私から3つの提案をします。

1 つめは、自立（自律）しましょう。あてにならない国や役所を嘆いても仕方ありません。自分の周りから互恵的に支え合う関係を築き、ネットワークを広げましょう。

2 つめは、知らずに悩むのではなく知って考える生き方をしましょう。変化する社会の問題解決のために必要な学習をし、必要な資格を取得してください。

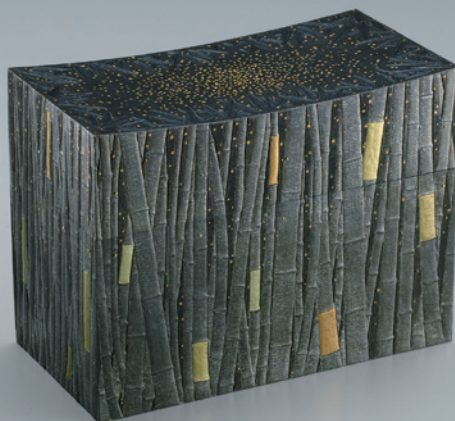
3 つめは、世界が未体験の超高齢社会において、日本の高齢者がどんな活躍をするか注目し、学んでください。もちろん私も手本になれるよう、生涯現役でがんばりますよ。



昔の作品は、おおらかで何とも言えない良さがある



龍銀地象嵌匣「丁夜」(2017年)
第57回東日本伝統工芸展 東京都知事賞



龍銀地匣「寂静」(2015年)

金工 奥村公規

Okumura Kouki

1950年 東京に生まれる
1975年 武蔵野美術大学卒業
1995年 第42回日本伝統工芸展 文部大臣賞 文化庁買上
1999年 パリにて 日本の工芸「今」100選展出品
2000年 日本橋三越にて個展「祈り」開催
2007年 第36回伝統工芸日本金工展 文化庁長官賞
2007年 第54回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞
2012年 第52回東日本伝統工芸展 東京都知事賞
2016年 第45回伝統工芸日本金工展 宗桂会賞
2017年 第57回東日本伝統工芸展 東京都知事賞
現在 日本工芸会正会員



法隆寺の鍍金鈴を復元したアクセサリーを手に。本物は銅に鍍金だが、金で作るとより良い音色になった。工芸展の会場で中学校の恩師と再開したのが復元に取り組んだきっかけという。

見た目は漆の木箱のようで、触って初めて金属とわかる奥村公規さんの作品。鍛金や象嵌やうがんの技術を高めつつ、日本人が金属とどう向き合ってきたのか、昔の工人に思いを馳せながら作品を作っている。

——元々金工に興味があったのですか。

最初は刀剣に興味を持ち、中学生の頃から友達と一緒に刀屋を巡ったり、小遣いをためて買ったりしていました。そのうち本物の素材が欲しくなって、刀の鐺つばを集めていました。それが金工に興味を持った始まりです。

鐺はお洒落なんです。刀を差した時にどこから見られているかというのをきちんと考えてデザインされている。模様を入れる位置も計算しつくされています。表面の地肌も単調にならないよう、鉄の肌合いや色合いを楽しめるように配慮されているのです。

——日本の金工技術の発達は、刀装や仏教美術と密接に関係していますね。

鍍金・鍛金・彫金の技法は弥生時代に大陸から日本に伝わり、銅鏡、鉄剣、甲冑などの製造に使用されました。仏教伝来に伴い、仏教美術品の制作に広く用いられ、奈良時代に入ると、大仏や仏像に生かされます。刀装金工は室町の頃が最高だとよく言われるのですが、私はもっと古い頃から良い作品があるんじゃないかと思っています。

——技術はどちらで磨かれたのですか？

私が美大に行った頃は金工でもジュエリーが人気で、学校では伝統技術をあまり学べなかったんです。近くの先生のとこに週1回通ったり、古いものを壊しながらいじったり、ほとんど自己流です。最後の鍍金の仕上

げの方法がわからなかったとき、伝統工芸展に行って鉄の良色を出してる作品を見つけて、図録で先生の住所を見て訪ねて行ったこともあります。その時は早く教えてくださいました。文化財の修理などもほんとうに勉強になりますね。過去の人が金属とどのように向き合ってきたかを実感できる良い機会になっています。

——具体的な例を教えてくださいませんか。

七支刀と呼ばれる国宝の復元に関わりました。4世紀に百済から渡ってきて、奈良県の石上神宮の境内に埋まっていたもので、考古学界では何が書いてあるのか大騒ぎになった。左右に三本ずつ枝を広げた特異な形をしていて、最初は刀鍛冶が鍛造で作ろうと試みたけどうまくいかない。折れている刀身の様子やその断面などから、溶かした金属を型に流し込んで作った鋳物ではと言う人が出て、鋳造で復元することになったのです。鋳型と金属の収縮率の差で折れてしまうなど失敗が続き、4度目の実験でやっと成功しました。



その刀身に象嵌を入れたのですが、鋳造は硬くて象嵌するのは難しく、一昼夜熱処理して表面を柔らかくすることで象嵌できるようになる。当時の人はそうした難しい技術を持っていたわけです。

——奥村さんの作品は、漆器のような質感から石のような地肌まで、金属とは思えない不思議な感じですよ。

一見漆器のような鉄地象嵌小匣「離れ」は、鉄のサビ色に椿が映えるように、周囲を金の象嵌で引き締めています。箱のデザインはなかなか難しいのですが、コーナーをデザインとして生かしてみました。このように金属を磨き上げると漆のような質感になるのですが、それ以外にも鋳物のような肌合いを生かしたいというのも長年のテーマでした。まず素材の段階で荒らしをほどこしザ

しろがね小匣「渡海」(2016年)
第45回伝統工芸日本金工展 宗桂会賞



黒銅地金象嵌薫爐「両界」(2013年)



鉄地象嵌小匣「離れ」(2012年)
第52回東日本伝統工芸展 東京都知事賞



ラザラにするんですね。そして色上げ前に金属を酸で洗う際にも工夫をします。四分一という合金は、銅と銀の配合によってグレーの濃淡を変えるのですが、酸に入れると表面の銅だけ溶けて銀色になってしまうので、炭で研いでピンク色してから色上げする。その際、凸凹があると凹んだところは研いでも残るので、色が2色混ざった臙げな表現もできるので。

——これからはどういう展開を考えていますか。

かつては男性のお洒落にと、様々なオーダーがありましたが、近年は既製品でもすぐれた品物が増え、オーダーをする人が少なくなってきたのは残念です。しかし、日本の金工技術はとてすぐれているので、それを後世に伝える仕事に関わっていききたいですね。

昔の人の作品を見ると、幕末・明治になると完成度が上がってきちつとしていますが、もっと時代を遡ると、おほかでなんともいえない良さがあるんですね。稚拙と言われることもあるけど、私はそう思いません。その良さは何なのか、永遠のテーマなんです。今後の作品にもそうした良さを表現できればと思っています。



聞き手: 上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

祝

2017年3月 名古屋学院大学博士号(経営学)取得

宮島康暢 さん(取得時53歳)

【論文テーマ】中小企業の発展段階に応じた「経営理念に基づく経営計画」の策定および実行に関する研究 ―情報の非対称性緩和の視点から―

従業員が幸せな中小企業を増やして、世の中を良くしたい

■ノドに刺さった小骨のような挫折感

21世紀に入ったところ、都市銀行から政府系ベンチャーキャピタルに転職、名古屋学院大学のMBA課程でも学んでいた宮島康暢さん。マーケティングの研究者・羽路駒次教授との出会いが、博士号を目指すきっかけとなった。社会人の大学院入学が増え始めていた2005年、宮島さんも「中小企業の企業価値」を研究テーマに博士課程に進んだ。

しかし、タイミグ悪く仕事が多忙になり、博士号取得は諦め、3年目で単位取得退学を選んだ。宮島さんは元々目標を立てて勉強するのが好きで、仕事に関連したファイナンシャルプランナーや中小企業診断士の資格試験も、計画通りクリアしてきた。それだけに、仕事のためとはいえ途中で諦めた博士号のことが、ノドに刺さった小骨のようにずっと引っかかっていたのだ。そのころ大学院の再入学制度ができて、合計6年までは籍を置くことになった。宮島さん自身も、仕事に関連して中小企業学会で研究発表をしたり、論文が学会誌に掲載され、研究心に再び火がついた。

■自分のためだと感じた博士号取得支援募集

2013年、5年ぶりに大学院に再入学し博士号に再チャレンジを始めた宮島さん。最後のひと押しは当財団の博士号取得支援事業だった。「自分のために用意してくれたのでは？」と共感し応募したが、残念ながら不合格。2年目も最終面接で落ちた。一瞬諦めかけたそうだが、3度目の応募で2015年度に合格、そうそうたる面々と共に、有名大学でも

ない自分が認められずごく自信になったという。

2014年には仕事でも独立開業し、へきずなコンサルティング・コーチングを立ち上げた。経営者の特権は時間を自由に使えることだ。前職からのつながりで、開業時点で数社の顧問先に恵まれたのも経済的に大きい。5年前と違って、周りのいろんなことがうまく回転してくれた気がする。

■中小企業ほど社長の思いが経営に影響する

「大企業の多くはサラリーマン社長で、せいぜい5、6年で社長が交替していきます。それに比べて中小企業の社長は何十年も経営者であることが多い。その思いや企業理念が経営に及ぼす影響が大きいのです。だから中小企業こそ経営理念を明確に文章化し、従業員にはもちろん、取引先や金融機関に対しても見える化しなくてはいいけないのです。」



財団協賛会員のコーチ・エィでコーチングを学び、その時から財団を知っていたが本支援事業には感激したという。

創業社長の場合は、比較的思いを訴える場面も多いのですが、誰もが話し上手とは限りません。さらに代替わりすると、創業者と2代目の間に、社長と従業員の間に、社員と社外の人との間に、意識や価値観のギャップが生まれがちです。その状態を『情報の非対称性』と言います。

私は銀行にもいましたが、昔は情報の非対称性を正すことができず、わからないから融資しないという選択に流れていました。今は銀行も変わってきたので、経営理念とそれに基づく経営計画を、情報として積極的に与えることが必要なのです。もう一つ、非対称性を解消しようとすると、必然的にコミュニケーションが活発になることも有意義です。そして、経営計画を実行できたかどうか、事後の情報を共有することも欠かせません」

■お手本としたい「年輪経営」

宮島さんがお手本としたい中小企業の一つにあげるののは、「年輪経営」の伊那食品工業である。訪問した際、塚越寛会長の思いや価値観がすべての従業員に浸透し、理解というレベルを超えた、各人の誇りと自信になっているのを感じたという。コンサルティングやコーチングを通して、1社でも多く、伊那食品工業のような従業員が幸せになる中小企業を増やす手伝いをしたいと語る。

「これから博士号にチャレンジする方、まさにチャレンジ中の皆さん、決して諦めないでください。『諦めないことが成功に近づく唯一の道である』という言葉を贈りたいと思います」